

だらしのない物語 ――《青空を吸い取った漆黒》N-1

望月苑巳

闇夜は星が美しい
月の出た夜はひとが美しい
梅の香りをまとい笑っているよ
月の光も薫っているよ

でもね

雨の降る日は
天の涙に表札が磨かれて
大根のように冷たくなるよ
ずぶぬれで返ってきた父は
母さんが置いて行った
子守唄をうたっているよ
赤ん坊をあやすように
空のご機嫌をとるように
泣きたくなるような子守唄だったよ

人間は二度死ぬ

最初は焼かれて灰になった時
二度目は存在したことさえ忘れられてしまった時

そんな始末書の脇で
ぼくが冷たくなっているよ
開いた瞳孔が青空を吸い取ってしまったのか
朝から雨
だらしのない雨だよ
きのうまで蛇口で水を飲み
好きなものを食べて
堂々と人を好きになったりもしたのに
だらしのないったら、ありやしない

劣化してゆく、ぼく

退化してゆく鍋の底に

溜まっていたのは

使い方を間違えた父の靴ひも

なにも知らなかったあのころに帰って

だらしない雨に打たれ

三度目の死を迎えるよ

だらしないぼくの物語だよ